

第五章 底流

「ひどく怪しいと思うんだ。とつてもね……」

「コーティは最後のトランクを荷造りする手を休めずに続ける。

「くれるんだつたら別にやだとは言わないけど、どうして一万なの？」

「一万だつたらいけないかね」

「いけないよ。一〇〇〇だつたらいい。納得する。二〇〇〇でも許す。でも一桁多いんだ。引越すのにお金はかかるよ、パパ。

「首都なんかに移つたら、物入りだしね」

「変に大人っぽい言葉を使うじゃないか、コーティ」

「あたしだつてもう一五だよ。調べたんだ。首都つて高いの、何でもかんでも。その分、安全みたいだけど。それにね、今一万くれる余裕があるんだつたら、半年前にくれたつてかまわなかったじゃない」

「コーティ……」

「デュランはいささか傷つけられた口調になる。“戦死・戦病者への補償を最優先する”との名目で、デュランが退役したときの一時金は大きく削られた。一時金をコーティの進学の資金に、と考えていたデュランは少なからぬショックを受けた。彼が酒に耽溺するようになった一つのきっかけでもある。

「知ってるよ、パパ。一万じゃ、大学に一年しか行かれないつて。でも、うちの六カ月分の収入だよ。そんな大金、ほんと出してく

れる人が本当にいるなんて、そんな簡単に信じられる？ 配達の料金だつて、なんだかんだつて渋る連中が多いんだよ。頭きちゃ

う。バイク走らすんだつて無料ただじゃないんだもの」

「お気に入りのセーターを放りこみ、コーティはボタンと古ぼけたトランクを閉じる。閉まり切らないのに、上からどすんと座り込み、無理やりロックを下ろした。小柄な彼女が、トランクの上に座り込んだ子猫のように見えるのに気が付いて、デュランは微笑わずにいられない。

「あたしはいいんだ。こんな埃っぽい町に住んでたら、咽喉の奥まで砂だらけ、女の子らしいきれいな声なんて出なくなっちゃう。今だつて、かなりひどいけど」

「ひどい声じゃないと思うがな」

「それを親のひいき目つていうの、パパ」

「確かにコーティの声はソプラノやメゾ・ソプラノに属してはいない。低音系アルトサウンドの強い、しかし、奇妙に人の耳を引き寄せる魅力に恵まれていないこともない。

「それに、一日走つたら、髪だつて真っ白。髪をセットするんだつて結構面倒なんだから……」

「セットだつて？」

「え？ 気が付いてないの？」

「無造作に伸ばしたままにしか見えない黒い髪を手にとつて、コーティは、しかし、少々ならず傷ついた表情。

「鈍いんだ、パパつて」

「……？」

「あたしの髪つて、自然にこんな風にウェーブがかかってくれないんだつてば。それなりに手を入れなきゃ」

「それはそれは……」

「そうだったかもしれない……デュランは、思わず髪に手をやる。」

「コーティの髪は、明らかに母親のマユ譲りだった。」

「コーティは、重そうにトランクを持ち上げる。」

「でも、パパ、変わったね」

「どこが？」

「お酒、飲まなくなっただじやない。引越したって、さっさと手続きしちゃうし……まるで……」

「まるで、戦役が終わる前のパパみたいだって？」

「うん。でも、コーティは今のパパの方がいいよ。お酒はつか飲んで漬れてるパパはみつともないし、怖いよ」

「怖い？」

「アル中って、見境ないんだって。自分の娘だろうが、なんだろうが……友達がいるんだ、父親がアル中の。その子が言ってたよ。」

「いくら何でもパパに襲われるんだけは、御免だもんね」

「……」

「……」

「……」

「……」

「恐ろしい内容を、あっけらかんとした口調で口にするコーティに、デュランは呆れる。イエルスベルグ……彼の妻、マユの両親の出身地。共和国母星でも、最下層の所得者が群居するスラム都市と言ってもよい。」

「行こうよ、パパ。こんな街、早く出てきたいもの」

トランクを玄関のホールまで運んだコーティの声がする。応じて、デュランは立ち上がった。ポケットに入れた小型の熱線ピストルが重い。銃を手放せない街での生活からの脱出。それをこう

いう形で果たそうとは、デュランはこれまで思っても見なかった。

「コーウインは無人の惑星に非ず。強力な軍備を持つ異星人の惑星であり、第八艦隊は壊滅」

共和国暦六月二四日、惑星「コーウイン」星系に進入したクリュッペル艦隊は、「シエルメス連邦空軍第三艦隊」を称する異星人艦隊に迎撃され、決定的な敗北を被った。

二二〇〇隻近いクリュッペル艦隊の内、脱出に成功したものは

わずかに六〇隻前後、四〇〇隻以上が破壊されるか大破させられ、七〇〇隻近い艦船が連邦空軍艦隊の捕獲するところとなって、

「コーウイン宙域の遭遇戦」は終了する。のちに「シユネーゼル

事変」と呼ばれた、シエルメス連邦空軍と共和国宇宙軍最初の艦

隊戦闘は、共和国宇宙軍の一方的敗北で、あっさりと幕を閉じた

のである。

この報告に驚いた者がいたとしても、それは参謀本部次長である

フォルター・ワシエック大将ではありえなかった。

士官学校を首席で卒業し、以後一〇年足らずの間に大将までの

階級を一気に駆け上がった秀才中の秀才である。士官学校在学中

は、「一〇年に一人の逸材」、「ワシエックの前にワシエックなし。

ワシエックの後にワシエックなし」とまで、その秀才ぶりを謳わ

れた。

「ワシエックに気の毒なのは……」

「ドレド戦役」で戦没した、ワシエックの同期生は評している。

「外見が一向に声価に一致しないということだ」

見苦しい程に太った男である。三〇歳を越えたばかりにもかか

わらず、髪は全面的に後退を完了しつつある。わずかに残った髪

を、苦勞して頭頂部に広げているのを、マールク艦隊の将兵など

は「月夜のブラインド」などと嘲笑している。強度の近視だが、

コンタクト・レンズを嫌って分厚い眼鏡をかけている。前線將兵は、彼に“禿豚”なるニック・ネームをつけて忌み嫌っていた。

第八艦隊壊滅の報告にも、ワシエックは肉の厚い無表情さをさして崩さなかった。

「フェレラ首相は、どうお考えです？」

最高戦略会議は、ドロク総長を頂点に、参謀本部の幹部だけが参加を許されている。参謀本部を構成する六つの部局の局長というだけでは参加資格を資格を満たさないのも一つの特徴だった。参加者となるためには、参謀総長であるドロク元帥と個人的に親密な関係を取り結ばなければならなかったのである。いかなる法的な権限も持たないが、寧ろ持たないがゆえに、この会議での決定は、政府と宇宙軍のあらゆる決定に優先する権威を持っていた。

ただし、全能の最高戦略会議も、その権威が及ばない領域は幾つか持っている。一つはマイルク艦隊であり、もうひとつは現首相のピセンテ・フェレラその人である。

「シエルメス……と、そのエイリアンどもは名乗ったぞうだ」

堂々たる偉丈夫。平凡な青年に過ぎないマイルクとは異なり、軍人の見本とでも言いたいような威風に溢れた軍人である。華麗な参謀飾緒を施した軍服が、これ以上似合う軍人は、ル・ラント軍には存在しないだろう。

ドロクの口調は“堂々たる軍人”には相応しくない野卑な響きを帯びたものだった。

「第八艦隊の侵略行為をシエルメスに詫び、国交の樹立を交渉したい、とのご意向だ」

第八艦隊のこうむった壊滅的な打撃と、コーウィンで彼らを迎え撃った異星人の正体が明確になった共和国暦七十七年六月、フェレラはドロクを官邸に呼び、激しい口調で問詰めたのだ。

「最大最強の実戦部隊であるマイルク艦隊と、我が共和国宇宙軍最良の将であるはずのマイルク元帥をつんば棧敷において、このような作戦を具申し、実行した参謀本部の責任は免れ得ない」

「マイルク元帥は、今次の作戦に反対でありました。翻つていえば、コーウィン作戦の失敗は、マイルク元帥の責任でこそあれ、光輝ある栄光の参謀本部の責任を追求されるなど、首相閣下の判断を疑います」

「貴官らはいつもそうだった」

「瘦身の首相は、しかし、いつになく容赦がなかった。」

「ドロク艦隊の空襲の直前、本国艦隊司令官を更迭したのは誰の進言によるものか？ドロクへの報復空襲を強硬に主張し、しかも、一旦世論からの攻撃を受け始めると、あれは出先の艦隊の独断専行だと言いつつ逃げを始めたのは一体誰か？ウエスコット・ローク中将を、明らかに法的に不備な軍法会議に召喚し、処刑したのは誰の差し金か？」

「根も葉もない戯言を根拠に、我が参謀本部を攻撃されるというのなら、我々にも多少考えるところがありますぞ、首相閣下。国賊ロークに対する軍法会議は、宇宙の大義に照らしても公明正大、一点の疑義もありません」

「いいでしょう。ローク提督に関する話をここで蒸し返すつもりはない。ともかく、わたしの判断はシエルメスとの平和的交渉だ。コーウィン……シエルメスはシュネーゼルと呼んでいるようだが……、そのコーウィン・シュネーゼルの報復など、思いもよら

「ないことだよ、ドロク元帥」

「コーウィンに無念の屍を曝した無慮数十万の共和国宇宙軍将兵の英霊に対して、そのような屈辱的態度で申し訳が立つとお思いですか、閣下」

「思います。ここで、無謀な報復作戦を開始し、更に数十万、いや数百万の死者を拡大再生産することが、コーウィンでの戦死者に対する慰霊になるとはわたしは考えない。元帥、我々はシエルメスについて何も知らない。よしんば、彼らと戦わなければならぬとして……一万歩を譲つてのことだが……、彼らの国力、軍備、地勢などを何も知らずに戦争などできるものではない。違いますか？」

「これは驚きました、閣下」

ドロクは嘲りの表情で、内心の動揺が表情に浮かび上がるのを辛うじて抑えた。参謀本部の恫喝に、これほど強い態度で応じた政治家はいない。ドロクは、彼のこれまで知らなかったタイプの政治家を前にしていることを悟った。

「閣下は我々、光輝ある参謀本部の軍人よりも軍事に造詣が深くておられるようだ」

フェレラは忍耐強い表情でかぶりを振る。

「そんなことはない。ただ、予算を出すのは我々です、元帥。スポンサとしては、あなたがたが張り合おうとしている相手についての情報を詳しく知りたいのだ。なにしろ巨額の投資ですからね」

「金ですと……宇宙の大義に基づき崇高な戦いを、閣下は金で論じようとなさるのか」

「また、そうやって論点をすり替える。無論、大義のない戦いなど、できるものではないが、金がなくては戦艦も作れないし、第

一、兵隊を食べさせることができない。元帥、君の給料サラリーも支払えないのだ」

「給料？」

「それとも、光輝ある栄光の無敵参謀本部スタッフは、向こう一〇〇年間、無給で働いてくれますか？」

話題の落差が、雄弁なドロクをも一瞬、絶句させた。

「どうか？ 無論、総長だけに無給を強いほしくない。参謀本部のスタッフ全員と、閣僚……そうだな、ついでに上下院議員全員くらいはつきあうことにすべきと思うが？」

ドロクの絶句を観察するフェレラの視線は一切の感情を欠いている。間の悪い数分の沈黙を、フェレラは親切な饒舌で埋めようとはしなかった。

「そういうことだ。作戦は、光輝ある、栄光の、無敵、ええと不敗で常勝の参謀本部の職掌だ。しかし、金をつくること、これはわたしたち、政府の管掌するところだ。その権限に基づいて、わたしはシエルメスとの外交交渉を考えたのだ」

「シエルメスとの共存など不可能です」

「そうかな？」

フェレラは薄くなりかけている頭頂部の髪に手をやった。

「交渉もせずにかね、元帥？」

「交渉など不要ですぞ、首相閣下。シエルメスはコーウィンで我が艦隊を壊滅させた。報復が必要です。さもなければ、共和国圏は、いつシエルメスに侵略されるかわかったものではない」

「彼らの侵略を防ぐために、光輝ある参謀本部があるのではなかったのかね？」

苛立った視線が、ドロクの紅潮した容貌を突き刺した。

「万一に備えてシエルメスを十分に研究しておいてください、元帥。準備不足では、いかに無敵共和国宇宙軍といえども有利な戦いのぞめないだろう」

「我々、光輝ある栄光の参謀本部を無視しようとのご意向ですな」
ワシエックは無表情に相づちをつつた。

「どうなさいます？」

「閣議を召集するように要求した。フェレラ首相は少数派閣の出身だ。閣議を取り纏められる器ではない」

「さようですな」

「閣議では、首相の提案は否決され、対シエルメス開戦が議決される……我が参謀本部の意向を無視しては何事をもできぬことを、世間知らずのフェレラ首相に知らしめてやるうではないか」

「それにつきまして、閣下……」

ワシエックの口調にはおもねる響きが露わだった。

「多少の工作が必要か、と考えます。最悪の場合……無論、宇宙の大義は我らにあるのですから、そんなことは起こり得ないと思えますが……最悪の場合に備えて、最も強硬な手段を用意しておくのも悪くはなからうか、と考えます」

「最も強硬な手段だと？」

「は……」

肥満禿頭の参謀次長の口から語られる“最も強硬な手段”に、会議の参加者たちはさしたる違和感も嫌悪感も表さずに聞き入った。ドロクが頷く。

「宜しい。貴官の策を認めよう。今回に限ったことでもないだろう」

うしな。手配は貴官に任せる。機密費の流用も認めよう。貴官に對する侮辱になるかもしれないが、敢えて問う。任せてもよいな」
いつもは騒々しい足音をたてる軍靴が、この時は乾いた音を立てて打ち合わされた。

「全力を挙げ、閣下の知遇に応えさせて頂くでありますよう」

最高戦略会議が開かれている頃、ピセンテ・フェレラは思い切った手を打っている。アリシア・ミュッケル下院議員のオフィスに個人通話を入れ、アリシア自身との直接通話を申し入れたのだ。

「何のご用ですの、首相閣下が直々に？」

この時期のアリシアは、最年少の下院議員、ネイス・ミュッケル中将の姉、年齢に似合わぬ敏腕の議員としては知られていた。しかし、まださしたる権限を持つわけでもなく、目立たない存在だった。参謀本部と軍需産業、そして政府内の強硬派、いわゆる政産軍複合体の敵意と憎悪が彼女に集中するようになるのは、この翌年、彼女が上院議員の座を獲得してからのことである。

上院選挙は七一年の一月に予定されている。下院議員として未だ一期を務めたに過ぎないアリシアだったが、ちょうど、同じ選挙区の上院議員が引退を表明していた。件の議員は息子を後継者に仕立て上げるつもりのようなようだったが、支持者の半数以上が反対している。首都の復興計画で優れた手腕を示したアリシアへの支持を表明する者も多い。

「依頼がある」

「依頼？」

「マールク元帥と直接に会談したい」

「マールク元帥と？」

金色の美しい眉が跳ね上がる。フェレラは言葉を継いだ。

“この回線は暗号化されている。一応、わたしのオフィスには盗聴器はセツトされていない”

「こちらは、さつき掃除を済ませましたから」

“なるほど……で、本題に入りたい。わたしはマールク元帥と会談したい。直接、かつ内密に、だ。無論、呼べる。わたしに権限はある。しかし、元帥は警戒するだろう”

「わたしも警戒します。何の畏ですか、首相閣下？」

“畏ではない……と言っても信じてもらえないのは悲しいことです。あす、書類を一通、届けさせよう。それを見てからもう一度、考えてほしい。番号は……”

四桁の数字列を口にし、フェレラはメモにとらないように、と念を押した。記憶力に優れるアリシアにとって、四桁の数字を記憶するのは困難なことではない。

“その書類がわたしからの依頼の代償の第一。元帥との会談を持てれば、別の代償を支払う用意がある”

「まるで裏取引ですね」

“その通り。しかし、正当な取引だ。拒絶する権利は、無論、あなたにある”

「その書類とやらを拝見してから、考えます」

“妥当な、しかも健全な考えですね。では、選挙での幸運を祈ります。よい夜を、ミス・ミュッケル”

翌日、フェレラが口にした四桁の数字の振られた封筒がアリシアのオフィスに配達された。無署名の封筒に、爆弾ではないかと怯えるオフィスのスタッフをよそに、アリシアは平然として封を

切り、数枚の書類を取り出した。読み下すサファイア・グリーン
の瞳がさつと緊張し、書類を持つ手が震えた。

惑星コーウィンでのシエルメス人との遭遇。第八艦隊の壊滅に
関する報告書と、ドロク元帥が提出した新たな艦隊作戦案、“コー
ウインの報復”なるシエルメス連邦への報復作戦の要約である。

コーウィンへの遠征が失敗したらしいことを、彼女はネイから
の手紙で知っていた。コーウィンが異星人の植民星であり、ク
リュツペル少将は無理な戦闘を行って自滅同然に敗れ去ったこと
を、ネイはさりげない筆使いで姉に知らせてきている。

遠征に参加した将兵の家族には、“極秘作戦に従事中、殉職”と
の通知がなされるだけ。アリシアの許にも、戦死した将兵の家族
からの訴えが何通か寄せられていた。“息子の行方を明らかにし
てほしい”と。公式、非公式に、第八艦隊の敗北を確認しようと
する試みは、しかし、ことごとく失敗した。政府と参謀本部は強
力な報道管制を布き、共和国母星のマス・ジャーナリズムは一切
の追求を最初から行おうとすらしめない。

ある編集者は言い放った。政府追求のキャンペーンの可能性の
打診に出向いたアリシアに向かって、である。

「万一、共和国宇宙軍の艦隊が失敗したとしても、そんなことを
書いた記事を読みたいと思う読者は皆無ですよ。我々も事業です
から」

問題は、ドロクの手になる作戦書だった。“長駆、シエルメスの
母星を衝き、共和国に拝跪せしむる”と称しているものの、動員
兵力は二個艦隊。しかも、肝腎のシエルメス母星の所在に関して

は、“必勝の信念を持ち、将兵をして勇戦敢闘するを得れば、シエ
ルメス母星の所在はおのずから明確となるは論をまたず……”な

どという抽象的な精神論に満たされている。補給も“常勝不敗の信念は、能く補給の不備を補い、また止むを得ざるに至っては、敵地よりの徴発も可なり”などとしている。

アリシアは頭痛を覚えた。これが、“光輝ある参謀本部”の作戦なのだ。士官学校を出たての少尉候補生でも、もう少しましな作戦を立てるだろう。無論、参謀本部の作戦案は最高機密であり、下院議員であろうと、たとえ上院議員であろうと、自由に閲覧できるものではない。もっとも、巨大なデータバンクに収められている“作戦”は、どれ一つとして実行されたことはないのだ。“ドレド戦役”を共和国母星の勝利に導いた作戦は、全てクロウネス・マールクという風変わりな青年の風変わりな頭脳から転がり出たものなのだから……

最初、“最高機密”を送りつけてきたフェレラの真意を、アリシアは読みかねた。悪く取れば、アリシアが機密書類を盗み出したとして処断するための謀略ということもありえそうだった。廃棄してしまおうか、とも思った。これまで、政治家という職業を持つ人間を信用して、よい結果が得られた例はない。が、作戦書類に付されていた別の書類がアリシアの気を変えさせた。

フェレラ首相自筆のサインの入った書簡。作戦書類を送付したのはフェレラ本人であると簡潔に記された、その書簡の内容がアリシアに首相を、ある程度ではあるが信じさせたのだ。結局、フェレラはマールクに会いたいらしい。おそらくは、ドロクが提出した無謀極まる作戦案に関して。

「タチアナ……」

アリシアは秘書を呼んだ。

「はい？」

タチアナ・ラーリナは、資格をとったばかりの若い秘書である。何故、ここでの仕事をしたいのかと尋ねたアリシアを、サラリーがいいからと応えて啞然とさせたことがある。ハイ・スクールを出ただけだから、サラリーを貯めてカレッジへ行きたいのだ、と。採用されてからは、アリシアの最も信頼する秘書としての立場を固めている。彼女に言わせると、ことによっては厳格過ぎるほど厳格なアリシアだが、慣れれば付き合やすいボスだということになる。

「ナキャソ要塞の艦隊司令部広報オフィスに連絡をとって頂戴ね。マールク元帥の所在を問い合わせてほしいの」

「マールク元帥ですか？」

「ええ。それに、ミュッケル中将のモね」

弟を「ミュッケル中将」などと呼ばなければならぬ違和感に、アリシアはまだ馴れ切っていない。

「分かりました」

タチアナは自分のオフィスに引っ込み、一時間程して戻ってきた。

「マールク提督はドライバオムへお出かけで、ミュッケル中将は艦隊演習中だそうです。どちらも、あと一カ月はしないと、ナキャソにはお戻りにならない、とのこと。お名前を出せば、便宜を図ってくれるんじゃないでしょうか、アリシア？」

「そうね……」

手にしたボールペンで、デスクの上を軽くトントンと叩く。ミュッケル中将の姉だと言えば、ナキャソだろうがドライバオムだろうが、担当の士官は恐懼して便宜を図ってくれる。自惚れではなく、アリシアは知っている。自ら努力して手に入れたわけで

もない特権を行使するのに、彼女は気が進まなかった。

「いいわ。止めておきましょう。その服、とても趣味がいいわね、タチアナ。どこで見付けたの？」

雑談に紛らわせながら、アリシアは考えを巡らしている。フェレラとマールクの秘密会談をセツトアップする前に、自分がマールクと会えなければ意味がない。といって、彼女自らがナキヤンやドライバオムに出向いていくなど、できることではなかった。来年一月に予定された選挙まで、あと六カ月足らずでしかなかったのである。

メル・ヤンデキフィティは七十七年の末で二〇歳になる。マールク艦隊でも最年少の艦隊司令官である。イエルスブルグ近郊の極貧の家庭に生まれた彼は、一二歳の時に少年兵に志願せざるを得なかった。三人いた兄弟も全員が少年兵を志願し、両親は辛うじてドレドへの強制移住を免れた。

彼がこの日に共和国母星首都にいたのは、単なる休暇である。休暇中、何度かヒースクリフ・ローナクと連れ立って首都の繁華街に繰りだしたヤンデキフィティだが、多大の戦果を上げるのは、金髪碧眼の美丈夫の提督だけだった。ある時、酔ったはずみにローナクに絡んだ彼はもの見事に酔い潰され、翌朝けるりとして朝帰りしてきたローナクに二日酔いの醜態を曝すはめになった。以来、太刀打ちできないことを悟ったヤンデキフィティは、ローナクの誘いを丁寧に断るようになっていた。

「器を知ったか、メル」

豪快に笑い飛ばすローナクを、ヤンデキフィティは呆れて見送

るのが常である。

「それも悪くないぞ、メル。人にはそれぞれの器がある。おまえは、所詮おれに対抗するような柄じゃない」

当たっているので反論できなかった。

この夜は、古い戦友たちとの再会だった。

会食を早々に切り上げ、ヤンデキフィティは市の中央部にある官舎へ向かう。CVS（コンピュータ制御車輛システム）を使ってもよかったのだが、歩いてもせいぜい三〇分である。ローナクに鍛えられたせいもあって、一本のワインはさして効かなかった。共和国宇宙軍官舎の高層ビルを間近に控えた一本道で、ヤンデキフィティは至近に沸き起こった爆音に立ち止まった。

「……！」

エア・バイク。音響規制装置を外しているらしい、そのエア・バイクは、一切の交通規制を無視した速度で掠めすぎるなり、ヤンデキフィティが手にしていたアタツシュ・ケースをひったくる。「何をやる！」

叫んだが、届くはずもない。角を回った轟音が、たちまち遠ざかり消えてしまうのを、ヤンデキフィティの聴覚はあやまたずに捉えていた。

「やれやれ……だ」

何も入っていない、それも量産品のアタツシュ・ケースを奪っていった暴走族に、ヤンデキフィティは寧ろ同情する。あのケースを売り払っても、燃料代も出ないだろう。そのヤンデキフィティを、また後から一筋のライトが照らした。

「止まれ、撃つぞ……!!」

身構え、反射的にボケットの熱線銃を抜き取る。さつきとは比

較にならない穏やかな、しかし腹に響くようなエンジン音が急速に近付き、そしてとまった。エア・バイクにまたがっていた小柄な人影が、ヤンデキフィティの熱線銃に気が付き、泡を食ったように両手を上げる。

「わあ、たんま、たんま。やめてよ、こんなのもつてないよ。折角、レイヴェルゲンに越してきたのに、強盗だなんて。お金ならポツケに入ってるから、殺さないで！」

子供というには、その声は大人びた響きがあった。銃を握ったまま、ヤンデキフィティはエア・バイクに近付く。

「強盗じゃない。強盗の被害者だ」

「じゃ、なんで銃なんて突き付けるのよ。危ないじゃない!？」

「女の子か……」

意外な気がした。エンジン音からして大排気量の高速バイクである。

「本当に強盗じゃない?じゃあ、泥棒?」

「どちらでもない。メル・ヤンデキフィティ。兵隊だ」^{↑バイク}

「兵隊?」

エア・バイクのドライバがヘルメットのバイザを跳ね上げる。

薄暗い街灯の下で、ヘルメットからはみ出している髪と、子猫のようにきらきらと光っている黒い瞳が辛うじて見えた。

「そう、兵隊だ。あそこの官舎に住んでいる」

「あたしも」

「ふうん、じゃ、君も軍人なのか?」

言ってから、ヤンデキフィティは誤りに気が付く。相手はミドル・ティーンの少女に見えた。この辺りの官舎は将官と佐官にしか開かれていない。

「あたしのパパが軍人だったんだ。また、軍隊に戻ったみたい。少佐だった」

「なるほど……」

「それで、どうしたのよ、ヤン……なんだっけ?」

「ヤンデキフィティ」

「そう、ヤンデキフィティ少佐殿」

少女は、ヤンデキフィティの階級を四階級ほど低く見たようだった。二一歳のヤンデキフィティを、初対面で少将だと見抜く人間に、彼は未だお目にかかったことがない。まして、この時のヤンデキフィティは私服だった。

「強盗の被害者?」

「ああ、アタツシュ・ケースを奪られた。からっぽだったけどね。

あ、そうじゃないか。晩飯の残りをテイクアウトしてきたのを入れて置いたんだけどな」

「残念だけど、きつと出てこないよ。さつき走ってった暴走族かあ……本当にひどいよね、連中。それで、ヤンデキフィティ少佐殿、可愛い女の子をエスコートしてみない?」

「どこまで?」

「あたしの家まで」

ちよっと期待したでしょ、と少女は、女の子にしては低い音調で笑い声を立てる。小柄で、革のジャケットとジーンズ姿のシルエットは少年のそれとさして変わらない。

「それは願ってもない光栄だよ、きみ……」

「あ、あたし、コーティリア・バードフェザー。みんなコーティと呼ぶよ。一五歳。ハイ・スクールの一年生。宅配のバイトをしてるんだけど、今は帰るところ。ああ、びつくりした。変な格好し

た人がいるなって思ったら、熱線銃なんだもの」

「これは、はじめましてミス・バードフェザー。銃を突き付けた非礼は詫びる」

「やだ、少佐殿って真面目なんだ」

コーティは、ヤンデキフィティを少佐に一人決めしたようだった。

「軍隊ってそんなに堅苦しいの？」

「建前はね。実際には女の敵もいるし、飲んべえもいる」

ヒースクリフ・ローナクの男性的な美貌を、このときのヤンデキフィティはある程度の悪意を込めて思い出していた。

ヤンデキフィティが将官であることを知った時、コーティは目を真丸に近くした。ヘルメットを脱ぎ捨てると、呆気にとられたように、ヤンデキフィティの、未だ少年の面影の抜け切っていない容貌をまじまじと見つめる。

「え、え、え、えーっ？」

「悪いな。そんなに驚かなくてくれないか、ミス・バードフェザー」
清楚な美少女というタイプではないが、子猫に似て生き生きした表情をくるめかせるコーティに、ヤンデキフィティは悪い印象を抱けなかった。

「偶然と幸運と、それから何かあるかな。悪運と、それから多少の努力」

「……それで少将閣下？」

「まあね……そんなに驚くことなのかな？」

「じゃないのかなあ……だって、パパはもう四〇歳だけど、まだ少佐だもん。ヤンデキフィティ少佐殿……じゃなかった、少将閣下は幾つ？」

「二一になったばかりだ」

「あたしと六つしか違わないじゃない。偶然と幸運と悪運と、それから多少の努力で、そんなに違うものなのかなあ？ 神様不公平」

言葉を失って、ヤンデキフィティは肩を竦める。そろそろ立ち話を切り上げる頃合だった。

「もうすぐ休暇が終わるけれど……しばらくは、ご近所ということになる。きみのパパにも宜しく」

「うん。じゃあね、お休みなさい、ヤンデキフィティ提督閣下」

「お休み、ミス・バードフェザー」

不快な半日だった……踵を返しながら、ヤンデキフィティは咳いた。旧友には不快にさせられた上、ひったくりにまで会ってしまったという念の入れようだ。しかし、最後には奇妙に気分のいいところもあった。ああいう子供が母星にいるというだけで、休暇も楽しくなるうというものではないか……

コーティことコーティリア・バードフェザーのことを、ヤンデキフィティはそれきり脳裏から追い出してしまった。休暇の終わりまであと一〇日もなかったし、僚友たちから頼まれた買物も少なくなかったのだ。第四艦隊司令官であり、親友でもあるファートウリック・ラング中將は古典音楽のディスクを探してくれるように言ってきたし、マールクからも出版されたばかりの古典文学の復刻版を買い求めるように頼まれていた。鉄色の強い髪と、やはり薄い鉄色の瞳の青年は、せつせと首都を歩き回った。

休暇があと二日となった七月一八日の早朝、ヤンデキフィティは映画の電子音に眠りを覚まされた。

「……はい、ヤンデキフィティ」

“もしもし、ヤンデキフィティ提督閣下？”

やや擦れた、低目な声を記憶の底から拾い上げてくるまでに数秒の沈黙が先行した。

「もしもし、切れちゃったのかなあ、ぼろ電話！」

「……ああ、思い出した。ミス・バードフェザー……だったよな」

「あ、つながってた……本当にヤンデキフィティ提督閣下？」

「メル・ヤンデキフィティ本人に間違いはない。その“提督閣下”というのは止めてくれないかな、ミス・バードフェザー。提督だけでも十分すぎるくらいだ」

「そっちだって、あたしのこと、ミス・バードフェザーなんて呼んでるじゃない」

反撃は、ヤンデキフィティをたじろがせた。コーティリア・バードフェザー……通称コーティ……一〇日ほど前に会った元気のない少女のフル・ネームを思い出せたのは、通話が終わりかけた頃だった。

「他に呼びようがないと思うんだが」

「いいや……どうでも。パパがお礼にお茶に呼びなさいって。今日だけど」

「そいつは光栄だ」

もう出掛ける予定もない。残り少ない休暇の一日を有意義に過ごさせてやる、というのであれば、拒絶する理由は何もなかった。

アドレスと電話番号を聞き取ったヤンデキフィティは、その日午後の訪問を約して通話を切った。

少年時代から軍隊生活を送り続けているヤンデキフィティは、“午後のお茶”などという習慣からは無縁だった。

「……一二の時に志願して、少なくともずつと突撃艦が駆逐艦に乗っていました。戦艦と違って、駆逐艦にはお茶の時間などありません。突撃艦になると、身体を動かすスペースすらあまりありませんからね。砲の照準装置や、操縦パネルの脇でレーションをかじり、飲料水がぶ飲みするのがせいぜいですから」

「恥ずかしい話ですが、わたしは戦艦にしか乗った経験がない」
デュラン・バードフェザーは、娘のコーティとまったく正反対の印象を、ヤンデキフィティに与えた。二〇近く、あるいは以上も年下のヤンデキフィティが、彼よりも四階級も上位の階級を占めているのである。よほど理性的ならともかく、感情的な反発は免れないはずだった。実際、若すぎる提督として、ヤンデキフィティは古参の高級士官の反発を抑えるのに苦労した経験が一再ならずある。コーティではないが、“幸運と偶然、悪運と多少の努力”で、彼が提督と呼ばれるようになったのであれば、“神様、不公平！”と苦情を申し立てるのは自然な感情ではないか……ヤンデキフィティはそう思うし、だからこそ、彼に反発する部下を強制することは余りしない。

デュランは、しかし、ヤンデキフィティを少将として扱い、いささかの違和感も示そうとはしない。むしろ、マールク元帥の幕僚の一人に知遇を得られた立場を歓迎するかに見える。

バードフェザー家の官舎の外は、完璧に整頓された印象を与えるものではなかった。もっとも、比較の対象がアリシア・ミュッケルの自宅というのでは、比較される相手が気の毒というものだったかも知れないが。

ローナクは言う。

「アリシアのようなスーパー・レイディを知人に持つというのも

善し悪しだ。彼女と比較したんでは、見えるべき美点も長所も霞んでしまふというものさ。ま、もっとも、俺くらいに経験を積むと話はかわつてくるがね」

おそらくは、官舎の環境維持を担当しているコーティの個性が反映しているのだろう。雑然としていながらそれなりに奇妙にパランスのとれた室内の印象は、ヤンデキフィティには快かった。彼のなれ親しんだ駆逐艦のキャビンと奇妙に共通する雰囲気でもある。

「悪いんだ……提督閣下。家さ、安物の食器しか置いてないの。いい食器買ったって、みーんなパパが壊しちゃうんだから」

「コーティ、失礼な言い方はよさないか」

「嘘じゃないものね」

小柄な、ちよつとばかり猫背気味の少女は、舌をべろりと出してみせただけだった。

ただし、ヤンデキフィティは気づいている。猫背気味、と言っても、彼女は実際に猫背なのではなく、小柄なのと、無造作に肩に広がっている黒い髪のためにそう見えるだけなのだ。強化セラミックのマグに満たされた安物のコーヒーマグは、ヤンデキフィティにとっては飲み慣れた食器であり飲み物である。

「それにしても、もう少し、ましな食器はなかったのか、コーティ？」

「いや、いいですよ、ミスタ・バードフェザー。このサンドウィッチは旨い……口糧が何十日も続くと、旨いサンドウィッチが食いたくたたまらなくなる。将官になると、ある程度待遇が変わることになっているけれど、これは平時だけのことですからね」

「変わってんだ、提督閣下」

コーティは遠慮という単語には余り縁がない。

「あたしの作ったサンドウィッチ食べて、美味しいって言ったの、提督閣下が初めてだよ……」

「別に驚くことはないんじゃないかな、ミス・バードフェザー」

「コーティだったら！」

「……ああ、それじゃ、コーティ。口糧とこれとどちらが旨いか、議論の余地はなさそうだ」

「いずれにしても、コーティリアの無礼な言動を容赦してください。さつた提督の寛容に感謝します。アルバイトなどはよせ、といつも申しているのですが……」

「だって、安くないんだよ、大学の授業料って。パパのサラリーだけじゃ、毎日レーションしか食べられないんだ。それでもいいの？お酒だって上がる一方なんだもん」

「コーティ、お客さまの前でなんだ……ヤンデキフィティ提督、わたし自身はこの先、さして昇進を願うわけではない。ただ、コーティの将来が心配でならない」

「それで、わたしに口をきいてくれとでもおっしゃる、バードフェザー少佐？」

ヤンデキフィティの口調がちよつと冷たくなる。

「やだ、パパったら、やめてよ」

「コーティ！」

「そんなのつて卑怯だよ」

「卑怯だって？」

「あだし、自分で大学へ行くからね……提督閣下、パパったら最近おかしんだ。パパの言うことなんて気にしなくてもいいから」

「コーティ……」

「自分のことなのに、邪魔するななんて言わないでよ、パパ。提督閣下とはね、この間、道端でくわしたただけなんだからね。そんなこと頼んで、恥ずかしくないの?」

「おまえは現実というものを知らんのだ、コーティ」

「パパこそ現実を直……つええと、直視したら?」

「わたしには、マールク閣下の知遇をコネとして利用できるほど高い権限を与えられていないのです、バードフェザー少佐」

前線でこそ、ヤンデキフィティは他に比類のない勇猛果敢な指揮官である。「勇将」ローナクでさえ、「おれに比肩できるのはベイとメルだけだ」と、その剽悍さを讃えたことがあるのだが、戦場の勇者は人生の巧者たるを意味しない。デュランとコーティの口論を、巧みに調停できる自信を、彼は持たなかった。

「マールク閣下にしてから、そんなことを頼んでも、快く受けてくださるとは限りません……」

「そんなこと、と言われるが、ヤンデキフィティ提督、わたしにとっては何ほど重要なことはないのだ」

「パパつたら黙ってよ」

激しい、というには奇妙に低い口調だった。通った鼻筋にちよつとしわを寄せ、唇を微妙な角度に曲げた少女は、一五歳という年齢に相応しくない、奇妙なほどに老成した表情を見せる。かつて級友たちに“チェシヤ”と呼ばれた冷笑未満の表情だった。きらきらする仔猫めいた黒い瞳から視線を投げ付けられて、デュランは、鼻白んで口をつぐむ。

「パパの言うことなんて放っておいていいよ、ヤンデキフィティ提督閣下。第一、大学行くか、宇宙艇のパイロットになるか、まだ決めてないんだ。どっちもお金かかるけど」

「よいアルバイトなら紹介できる、と思います」

ふと思いついた。

「エア・バイクが運転できるんだつたね、ミス・バードフェザー?」

「……もう、コーティだったら!」

「ああ、そう……コーティ」

「できるよ。二〇〇〇Cガスタービントタイプ」

「じゃあ、ここを訪ねるといい。エア・バイクを運転できるメッセンジャーを探している人がいた」

渡されたメモを、コーティは濃い眉を寄せて読み取った。

「アリシア・ミュッケル下院議員事務所あ? 政治家なんでしょ、信用できるのかな」

「ペイはいいはずだ。腕のいいメッセンジャーには、気前よく払ってくれる女であることは保証するよ。これもコネだと言えは言えないことはないが、二〇〇〇Cクラスのエア・バイクを操れる人間は少ない。あまり良心の痛みは覚えなくても済む」

「ありがとう、提督閣下。じゃ、あとで電話してみる」

「そうするといい……今日は、お招きにあずかってありがとう。楽しい時間を過ごさせてもらったことに感謝する」

「帰るの? じゃ、送ってく」

ヤンデキフィティに続いてコーティも立ち上がった。眉をしかめるデュランに、例の冷笑とも憫笑ともつかない不思議な表情を投げ付け、小言を未然に封殺してしまう。

「……実際のところ、あたし、軍隊って嫌いなんだ」

ヤンデキフィティの官舎まで、一〇分ほどの道程を辿りながら、コーティはあっさりと言ったのける。

「宇宙に出てみたいけど、軍隊に入るのはやなんだ。パパ、変わっ

「ちゃったよ。軍隊に行つてから。でも、提督閣下みたいな人もいるんだ。マールク元帥も、やっぱり提督閣下みたいな感じなの？」
「さあ……どうかな」

「いつも何か困つたような表情を浮かべている、ぼさぼさの茶褐色の髪の青年。その青年の印象を、この少女に正確に伝えられる自信を、ヤンデキフィティは持たなかった。」

「まあ、余り軍人らしい様子には見えない人だ」

「ちよつと見なおしたよ、軍隊つてと……あ、バイト先の紹介、ありがと」

「いや、感謝されるほどのことでもない」

「素直じゃないね」

「コーティは、今度は心底、愉快そうに微笑つた。二一歳の共和国宇宙軍少将と、一五歳のハイ・スクール・ガールの足は、将官用の官舎入り口に達していた。」

「じゃあね、提督閣下。もう宇宙へ帰つちゃうんだ」

「まあ、そういうことだ。幸運を祈るよ、コーティ」

「微笑い、緩やかな身のこなしで、コーティは身を翻す。既に世の中に超然たる態度を身につけた若い猫のような、なめらかに歩み去つていく少女の後ろ姿から、ヤンデキフィティはしばらくは視線を外せなかつた。」

「共和国母星を離れる直前に、ヤンデキフィティはもう二度コーティの訪問を受けることになる。宇宙港に向かうため、官舎を出たところに、彼女のエア・バイクが滑り込んできたのである。」

「閣下、メッセージです」

「封筒を差し出され、ヤンデキフィティは呆気に取られる。」

「誰からだつて？」

「親展。提督の紹介だつて言つたら、このメッセージを大至急つて渡されたの。間に合つてよかつたよ」

「ありがと。きみの雇い主が、無意味なことをするはずはないからな。間に合つたのは、きみの腕のおかげだ」

「省略された主語を、ヤンデキフィティは正確に了解した。受け取り、軍服のポケットに押し込む。コーティは、ヤンデキフィティの差し出した五RCの紙幣を、敬礼の真似をして受け取つた。」

「ホバー・バイクを駐車場に突つ込んだコーティが、駆けるような歩調でその前に立つと同時にドアが開いた。」

「……！」

「完全な出会い頭の衝突を、コーティは持ち前の反射神経のよさで躲した。が、もっとも、正面衝突を免れたのは半分は中から出てきた長身の青年の滑らかな身のこなしのおかげに違ひなかつた。」

「失礼しました」

「穏やかな言葉が頭の上から降ってくるのに、コーティは被つたままのヘルメット越しの視線を投げ上げる。」

「あ、ご免！急いでたんです」

「従つていた、生真面目そうな青年が一步進み出ようとするのを、金髪の青年が素早く押し止めたのに、この時のコーティは気づいていない。」

「ミュッケル議員のスタッフの方ですね？」

「そうだけど？」

「では、急いで行きなさい。あなたに時間を無駄にしてほしくありませんからね」

「あ、はい」

ぴよこん、と頭を下げるコーティに青年は柔らかな日差しを思わせる微笑を残して踵を返す。束の間、コーティは啞然としてその背を見送った。

よほどしばらくして、コーティは僅かに首を振り、呟いたものである。

「わかんないもんだよね……」

二人の青年が身につけている服装が宇宙軍の軍服であることに気づいて、コーティはちよつと驚く。軍服と、青年の穏やかな物言いは、彼女の心理の中では必ずしも結びつくものではなかったのだから。

ネイス・ミュツケル宇宙軍中将。

この時のコーティは未だ、その名前を知らなかった。

ドライバオム宇宙要塞は、母星とドレド植民星の中間点であり、かつ“ル・ラント回廊宙域”の入り口という戦略上の要衝に位置する。“シュネーゼル事変”後、連邦空軍による報復攻撃の可能性は当然のようにマールクたちの視野の中に入っていた。

「可能性は低い。低いけれど、向こうにも都合のあることだから、こつちの判断だけで一人決めというのも危険だからね」

厳戒態勢を求める政府に対して、一応の警戒態勢は敷く、というのがマールクの回答だった。

「回廊の長さは五〇〇光年余りある。数日以上之余裕で進入は探知できるし、第一、ヴィルワ・シュネーゼルが前進基地化されていない。大部隊で進入するには補給に不安がありすぎる」

“戦略哨戒の名人”と言われるだけあって、マールクの張り巡らした警戒網は完璧と言えるものだった。ただし、与えられた予算の制約の範囲内では、という注釈付きだったが。

共和国暦七十七年七月二十四日深夜。

熟睡中だったマールクは、突然の警報に叩き起こされる。

跳ね起きる……という表現にはほど遠い様子で、マールクはミュツケルの姿を霞のかかった視界に捉える。

「そんなところで何をしてるんだい、ネイ？」

「エルヴェからです」

最前線の通信基地を設けた星系の名をミュツケルは上げてみせる。

「私の艦隊の方がエルヴェ寄りにいます」

「うん……それで？」

“シエルメス連邦からの通信です。共和国公用語と、未知の言語……おそらく連邦公用語でしょうね。連邦公用語が原文で、共和国公用語のものは翻訳でしょう。かなりの長文で、しかも大出力です”

「なるほどね……」

ゆつくりとマールクは起き出す。カフェイン錠剤を口に放り込み、冷水で飲み下しながら軍服に着替え始める。

着替えながらも、マールクの頭の中はめまぐるしく回転していた。

「読んだかい、ネイ？」

「共和国公用語の方ですが……」

応えるミュツケルの口調がちよつと後ろめたそうなのが、マールクにはおかしい。同時に、ほつとしていく。

「我が主席閣下か、それとも私宛だね。それも、割に平和的な中身だろう。違うかい、ネイ」

“ 平和的な内容です ”

どうしてお分かりですか、という言葉はミュツケルは省略している。宣戦布告のような軍事的内容であれば当然、彼自身の口調も緊張していたはずで、それがマールクに通じぬわけではない。

“ シェルメス連邦大統領リー・タウンナーより、共和国政府主席閣下宛の正式な外交書簡です。本来は、親展であるべき書簡なのですが…… ”

「どうやれば、こつちの通信で親展書簡になるのか、そこまではシェルメスもつかみ切れていないってことさ。で？」

ちらと視線を落とし……多分、書簡を表示したスクリーンを見遣ったのだろう……ネイは軽く息を飲み込んだ。

“ シュネーゼルでの不幸な邂逅……この書簡ではそう表現してあります。シュネーゼルでの不幸な邂逅を不幸なままに終わらせぬ為に、シェルメス連邦を代表して、外交交渉の開始を、共和国政府と市民に対して提案する……というものです ”